

UDC 04

年 頭 に あ た っ て

菊 池 眞 一



1968 年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。

生研の昨年度の主要な事がらをふりかえってみたいと思います。昨年度は（昨年といった方がよいでしょう）比較的内外無難の年でした。まず千葉実験場が6月1日から正式な施設としてみとめられました。千葉実験所（新しい名称）は従来試験溶鉱炉、津波高潮実験、海岸工学模型実験、2次元造波水槽、雷放電長期観測、爆破・破壊実験、土質工学模型実験、レーザ・ミリ波実験設備、ロケット関係施設、その他江上、野崎、北川教授の実験室など麻布においては音響、振動、悪臭、煙などのためにやや不適当と思われる研究を行なっていました。今回名実ともに施設となったことはめでたいかぎりです。なおそこへ岡本・久保教授の大型振動台が設備されて面目を一新しました。これは日本にないばかりでなく世界にも類例のない装置で、大きい機械、ダム模型などをグラグラ動揺させてその応力状態を見ようというものです。千葉実験所へ行かれたら、ぜひ見ていただきたい。

つぎに部門としては耐震機械構造学の新部門ができて亶理教授が新部門を担当されることになりました。これで本所は43部門になり大学附置研究所としては最大であります。

本所では電子計算機の使用が急激に増加し、いままでの計算機では消化し切れず、本郷の大型計算機も使用していますが、やはり地獄的な不便さもありますので最適設計処理装置という名目で申出ていましたところ、2年計画で予算がつくことになりました。森脇教授、渡辺教授、山口助教授などの研究の結果富士通信機の Facom 270-30 を購入することになり年度内には従来の Okitac と並び使用できるはずで、今回は特に On line の使用ができるように考えられています。

また久しく待っている暖房装置もできることになりました。最初に暖房を完備し、ついで主要な部屋に冷房設備をしようようになります。

昨年は岡本前所長のご尽力と皆様のご協力でこのように面目を一新することができましたのは喜ばしいことであります。私の就任の時にも申しましたように本所のように大きい附置研究所は皆で努力して研究の成果をあげないと、とかくの批判を受けやすいものです。本所の強味は各方面の専門家がそろっていて協力できる体制にあることであって、いままでロケット、試験溶鉱炉、振動研究などすべてこの協力のたまものといって過言ではありません。もちろんある一つの研究に皆が同じように協力することは少ないでしょうが、地味な下積の役目も喜んで果たす人があってこそ大きい研究ができるものです。もう一度ロケット研究を例にとりますが、内之浦の建物の設計をされた、坪井、池辺教授、測量を引受けた丸安教授などはその例と申せましょう。本所には特別研究審議委員会の制度があって毎年の各研究室の費用より多い費用を選定研究に充当し、また文部省に対し申請研究を願っています。この委員会は各部にこういう費用が均等にゆく配慮よりもどんどん実績が上がっている方を主として応援するという風でありたいし、過去の実績はそうになっていると思います。日本人は島国根性で仲間の成功をねたむ悪い癖があります。そういう風に先へ出る人の足を引っぱっては大きな仕事はできません。来年度は文部省の科学研究費も大幅に増加するという事ですから申請研究などで大いに努力してもらいましょう。

つぎにこういう研究費を貰うための心構えですが、その前段になる研究をよくやって、それをしかるべき学会誌になるべくまめに発表し、その実績によって獲得するように心掛けましょう。審査をする方の側でもいづれ甲乙をつけ難い場合やはり発表の多い人が勝つのは当然です。自分は書く暇があったらさらに研究を一步すすめたい。またはこの程度で報告するのは自信がないなど考える方もあるようですが、国の費用をもらって研究する以上はその成果をなるべく早く発表して一般に知らせることは責務でもあります。

最後にお願したい事は第一線の先生方も若い先生方もなるべく本所以外の仕事は少なくされるように望みます。私がおんなことを言う資格はないかも知れませんが、人間の能力には限りがあり、東大の教授・助教授はややもすれば便利に使われ過ぎるのです。その結果自分のさらに延びる能力を削ぎ、研究所全体のレベルを落し、また自分の健康をすらそこねるものです。どうぞ兼務をする時はもう一度それが本務にとって益ありや否やを確かめた上でやって下さい。

最後に皆様に苦言を呈して新年の挨拶を終わります。